

答辞

「春はあけぼの。ようよう白くなりゆく山際、少し明かりて、紫だちたる雲の細くたなびきたる。」

これは枕草子の冒頭の一部です。清少納言が春の夜明けの美しさを詠んだものです。私たちも今まさしく夜明けをむかえようとしています。今日で高校生活は終わりますが、また新たな旅路が始まります。私たち3年生729名はこの九州高校を卒業します。

本日は残念ながら、放送での卒業式となりました。人生には本当に思いもよらないことが起きるものだと肌で感じました。しかし、見方を変えれば、教室での卒業式というのも珍しく、一生忘れえぬ思い出となるのではないのでしょうか。一堂に会してはいませんが、私たち3年生の心は一つです。卒業式中止という選択肢も考える中、卒業式を執行してくださり誠にありがとうございます。卒業生一同、心より御礼申し上げます。

思い起こせば3年前。満開の桜の下、不安と期待で胸をふくらませた私たちは、九州高校の先生方、先輩方に入學を祝っていただきました。その日から今日までの3年間は、長かったようであつという間に過ぎていきました。それは、私たちの高校生活が充実したものだからではないのでしょうか。充実した思い出といっても、そのすべてが楽しかった思い出ではなかったと思います。しかし、文化祭や体育祭などの行事や、普段の生活の中で、何度も失敗して、友だちとぶつかって、後悔して、でもその度ごとにそれを乗り越えてきました。私はこれこそが本当の意味での充実した思い出ではないかと思っています。そして私たちは学んできました。失敗することの悔しさを。努力した先の成功の価値を。喜びを分かち合うことの素晴らしさを。

そのような3年間で過ごすことができたのは、たくさんの人の支えがあったからです。校長先生をはじめ担任の先生、顧問の先生など、今までたくさんご迷惑をおかけしました。たくさんお世話になりました。いつも先生方は、自分自身のことなのに諦めたり、投げ出しそうになる私たちを信じてくださいました。弱音を吐き、後ろ向きになりそうなときは、すぐに気づいて、背中を押してくださいました。叱られたこともあります。素直になれず、反発したこともあります。しかし、どんな時も私たちの成長をいつもそばで見守り、自分のことのように喜んでくださいました。先生方は、私たちの道しるべでした。本当に感謝しています。そして、もう一つ、私たちを支えてくれた大きな存在があります。それは家族です。いつも私をそばで支え、応援してくれました。一番近くにいるからこそ八つ当たりをしてしまったこともありました。ごめんなさい。でもありがとう。しっかり叱ってくれて、見守ってくれて。そして、これからもよろしくお願いします。今はまだ、与えられた愛情に応えるだけの言葉が見つかりませんが、感謝の気持ちであふれています。

私たちは今日、この九州高校を卒業します。友だちと明日も会うのになぜか夜まで話し込んでしまうこと。くだらない話をした時間が何よりも楽しかったこと。駄目だとわかっていたのに踏みとどまらず、先生から怒らってしまったこと。試験前になると、いつも以上に必死に勉強しあつたこと。それももう今日で最後です。社会に出ると、誰かにきちんと怒られることが無くなります。正しい方法や正解なんてないこの社会を明日から、私たちは生きていきます。それはとても不安なことです。しかし、私たちはこの九州高校で身に付けてきました。諦めない心を。立ち向かう勇気を。大丈夫です。私たちならできます。自信をもって明日からそれぞれの道へと進んでいきましょう。

そして、在校生のみなさんにこれからの九州高校を託します。私たちの残した光の跡をたどりつつ、より良いものを創り上げてください。応援しています。

最後になりましたが、九州高校のますますのご発展と、今回参列を予定していたご来賓の方々をはじめ、校長先生、諸先生方、そして在校生のみなさんのご健康とご多幸を心よりお祈り申し上げ、答辞といたします。

令和2年3月1日 卒業生総代 真子葵